
論理的な俺と比喩的な彼の愛を議題にした討論会。

湊

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

論理的な俺と比喩的な彼の愛を議題にした討論会。

【Nコード】

N1113A

【作者名】

湊

【あらすじ】

ある日の夕方、俺は帰り道の公園で彼と語り合ってみる。何かが変わるのを期待して。

その日、僕は隣にいた彼に今俺がもっている人生最大の疑問を問い
ただしてみた。

「なあ、《愛》ってなんだと思う？」

見上げればそこには蒼い空、白い雲。

とはいかないどんより曇っている今日の空模様。降水確率は20%
弱という感じだ。

「はあ？」

「いや、コレ持ちの依織なら解るかなと。」

そういつて俺は右手の小指を立てる。

その向こうに見える男は、缶コーヒー片手に呆然と俺を見ている。

「…紅、キモイ。むしろキショイ。」

「なんとでも言え。でもとりあえず俺の疑問にも答えろ。」

「なんで命令口調なんだよ！」

最近のラブソングはありきたりの歌詞であふれてる。

もうそれこそ、《愛してる》やら《信じる》やら《君がいなきゃ僕
は駄目なんだ》とかなんやら。

でも実際愛って何？と聞くと大抵のやつは言葉につまる。こんなに
も沢山耳にしたりすんのかな。

だいたいます、目に見えない、あるという確証もないのにこんなに
世の中に普及してる言葉はないよな。

俺は子供の頃から、目に見えないモノは信じない性格だった。

愛とかもそれに当てはまるモノだったりしてて。

あ、感情だからモノっていう代名詞は間違いか。

とにかく、俺は実際愛とか信じてないんだ。

けど、そんなひねくれ根性の俺がこんな質問をしたのには、ちょっとした訳があったりする。

『とりあえずちよいまで。』

お前のその質問に答える前に、なんで紅がそんなこと聞か知る義務ぐらい俺にはあると思うが。』

「ない。」

『即答かよ…。お前本当に何様ですか。』

時刻は午後の6時。

俺たちがいる公園には誰もおらず、俺と依織^{イオリ}だけの声がよく響く。向かいの依織は片手に缶コーヒーに、滑り台に座っている。

俺らの高校の制服は、ブレザーなので今のあいつはどことなくオッサンくさい。

かたや俺は、あんまんを食いながら亀村さんという大きな山オブジエに身を委ねてる。これはこれで子供くさいな。

『んで、一体絶体どうしちゃった訳よ。』

いつもの紅なら、>愛とーゆーもんは人間の古来からある自分の種族を繁栄させようとする本能をオブラートで綺麗に包むために先人達が用意したこのうえなく都合の良い言葉だろくって息継ぎ無しでバツサリいくだろ。』

「よく覚えたなそんな長い台詞。」

『そりゃあお前、ウチの高校No.1のモテ男で美形の椎野紅君が、数々の女をこの言葉で振ってきたからな。』

とゆーより斬ってきた、か。もはや名言だぞ。』

「俺は只、自分の想う理論を相手にぶつけてみただけだな。」

そういつて俺は最後のあんまんを口に頬張った。

口のなかに暖かなあんこの香りが広がった。

「まあ、お前が俺の納得のいく返答をしたら答えてやる。」

『…へいへいそーですか。んじゃ、男2人愛について語り合ってみ

ましようかね。』

あいかわらずどんよりの曇。

いつそのこと雨でも降ってはくれまいか。

そうすれば、こいつに聞かなくても、この変な気持ちを雨が洗い流してくれるかもしれない。

自分で考えてもサムイ……。なんだ俺乙女か？

「依織の彼女、霞ちゃんだっけ。お前の霞ちゃんへの気持ちこそ愛
つていうものなんだろ。どういう感じなんだ？」

『ハハ…照れることきくな。』

依織の顔が赤くなった。これも愛の成せる技というものだろうか。

『んう…どういえばいいのかな。』

俺はさ霞のこと考えるだけで、そりゃもう気持ちが暖かくなって…』

「カイロをはっているだけじゃないのか。」

『なんかこう…胸が苦しくなって…』

「動悸か。年だなリーマン。」

『顔がいつの間にかほころんできて…』

「変態か気持ち悪い。」

『…コーウくん。』

君は何故にそんなつつけんどんな態度とるのかーい。

…あ、解った、もしかして愛情のフライ返し…』

ー俺の投げたカンペンは見事依織のデコにクリーンヒットした。ー

「お前の変態根性には愛情を通り越して殺意が芽生えた。」

『き、君はアメリカに行って冗談と本気の境界をまなんだ方がいい
…。』

ふと時計を見てみた。

4：30。俺の帰る為のバスの発車時刻が近付く。

今日もアイツは乗っているのだろうか。

「確か二人の成れ染めは、お前の一方的な一目惚れだったな。」

『一方的なんて人聞きの悪い。』

「何故依織は初めて会ったやつに心ひかれたんだ？しかもお前は何回も告白し、そして何回もふられていた。何故そこまで彼女に執着したんだ？」

『そんなの当たり前だろ。』

好きになつたのに時間とかは関係ねえ。

それに、その気持ちが出来たら、その人を自分のものにしたい。

独占欲が生まれる、いい意味でのな。

この手の独占欲はかなりしつこい！俺の場合は特に。』

…ああ。そうか。

「ということは愛＝独占欲か？」

『それは違う。』

独占欲は愛の中に入ってるんだよ。

んで、まあ…俺が思うに、その《愛》はさ、言葉で表せないけど、自分が色々な形に変化させる粘土みたいなもんだと思う。

あ、好きと愛は違うとかあるけどさ、多分好きも愛の中に入ってるんだよ。

俺も霞と出会って始め《好き》だった気持ちが今はもう《愛》に変わってる。

俺のなかでは。愛はさ、実体がねえものなんだ。だから人それぞれ違う。』

…この気持ちはどうやら…

『でもきつと誰の心の中にもある。だって広辞苑にものってんだし。』

『とまあこんな感じかな。…あー自分で言って照れたよ。んで解ったかい？』

野暮だったんだな。こんな質問自体。

「…そっか、そうだったんだな。」

『解けたみたいだな。』

いやゝあ、お役にたてて嬉しいよ！ああそうだ、紅がこんなこと聞いた理由だけ…」

俺は依織が言い終わる前に亀村さんを降りた。なげたカンペンもきちんと拾って。

「悪い。もうすぐ帰りのバス来るから帰るわ。」

『はあ！？何だよいきなり。第一まだ理由聞いてねえのに…』

「依織。」

…「悪いがお前の文法滅茶苦茶論では、俺の考え方は変わらなかったけど…」

『あ、あんだよ。珍しく嬉しそうな顔しちゃって。』

「…ありがとな。」

『…！！（今まで何があっても俺に礼をいったことなんてなかったのに！）』

…「ヒントぐらいにはなったぞ。お前にしては上出来だ。…」

「あと、俺は今からこの質問の原因となった女に会^{ヤッ}いに行くつもりだ。」

三週間前。初めてアイツに会った。

学校へ行く時、バスの中だった。

そいつは何故か、他のやつとは違って見えた。何故だか。

いや、多分分かってたんだ。

気付いてたけど、気付かない振りをしていたんだ。ソイツは。茶色がかった黒色の髪の毛で。長さは肩の辺りまであって。右の方に蒼い華のついたヘアピンをしていて。真っ直ぐで綺麗な黒い大きな目をして少し小柄で、痩せていて。でもどこか燐としていて。

その髪に触れたくてたまらない俺がいて。

その目に見つめて欲しい俺がいて。

その軀を自分のものにしたい俺がいて。

話かけた俺がいて。
恋に落ちた俺がいた。

自慢じゃないが、この人生の中で俺は恋というものをしたことがなかった。

だからもちろん愛なんてものも知らなかった。

知りたかった。恋をしてる奴らはみんな楽しそうだったから。

依織もその中に入ってるんだよ。

でも分からなかった。

そんな中アイツに会った。

よく分からなかった。只、胸のところから軀全体に熱いものが染み渡った。

依織のいったとおり、苦しくもなった。とても辛くて、この気持ちを否定してみた。

でも、直らなかった。

依織が言ってたな。好きは愛の内に入るって。

なら、この気持ちが。《好き》の気持ちが、愛を知るヒントになるかもしれない。

だから、俺はまだ見ぬ愛を知るために、バスに乗り込む。

ーガシャーンー

「（…ハア、ハア。間に合った…。）」

依織がいうとおりにいくと、どうやらこの気持ちは好きというものらしい。

なら、その原因を作ったアイツに

初めて好きになったアイツに
この俺に苦しい思いをさせたアイツに

名前も知らないアイツに

責任をとって、俺の愛を知るための重要な助手になってもらおうじやないか。

今日もアイツは同じ場所にいる。
一番後ろの、左の窓際。

俺は思い立ったら吉日というタイプのような。
足が自然と、アイツの方へ歩き出した。

俺は目標達成のために、アイツの近くまで来た。キョトン顔でこちらを見ている。

「はじめまして。隣、座ってもいいですか。」

椎野紅。高校三年生。趣味は読書と音楽鑑賞。特技はバスケットだが何でもできる。恋愛経験皆無。告白経験皆無。告られ経験大多数。
そんな椎野紅。

どうやら一目惚れのようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1113a/>

論理的な俺と比喩的な彼の愛を議題にした討論会。

2010年11月29日09時00分発行